

## 書評

A. P. Buddhadatta & A. K. Warder: *Mohavinichedani*. xxvii, 384 pp. London, The Pali Text Society, 1961. ㄱ4-4-0.

A. P. Buddhadatta: *Jinakalamali* xv, 153 pp. London, PTS, 1962. ㄱ1-7-6.

パーリ所伝と北方アビダグマ所伝との関聯について新しい研究資料と方法が必要であり、それへの研究方向が今後の新しい分野を開く。このことについて、既に、私はロンドン大学の BSOAS, xxv. 2, pp. 373-375 に於て指摘しておいた。パーリ、北方両所伝のアビダグマ交渉研究は教義と歴史という両面よりなされようとするのが、世界学界の方向であると思われる。いずれも、未だ、端緒にいたばかりの段階に過ぎない。

特に、この傾向が指導的立場にあるパーリ協会によって、徐々に具体化せられるようとする企図が現れ始めた。その校訂上に於ける新しい方向の一例を示すものが、この *Mohavinichedani* である。Warder は既に、パーリ・コンコールドダンス及び *Introduction to Pali* の編著者として我々に親しい学者であるが、本書に対する彼の序文は如上の研究方向にそった新しい企画を示している。彼はパーリのマータイカーと根本説一切有部と説一切有部との関係及び後で加えられたと指定される贋子部のホトガラ説とそれのマータイカーへのアンミレーションなど

を論じている。この一篇は資料的にも方法論的にも極めて暗示に豊んだ論項である。元来、パーリ協会は、会長ホーナ自ら筆者に語った如く、序文に非常に重要な意味を持たせている。従来、梵文テキストの方からパーリの方へ歩みよる仕方は屢々あるが、その逆の方向は極めて少くない。

本書の著者は南インドの *Kassapa* と *Rajadhiraja* II (一七三一九) 時代に書かれたものと考証されるがそうするとインドで出来た最後の註釈であるということが出来る。*Kassapa* 自らは上座部の最もオンドックスなセイロンのマハーヴィーラ派の伝統に従ったと述べる。ガンダワンザによれば、造論者は該書の外、*Vinaichedani*, *Buddhavanasa*, *Angaravanasa* を書いたと伝えられる。更に、内容について言えば、該書はパーリ七論のマータイカー全部に対する註釈である。オリジナルなマータイカーそのものは第一結集時に、法・律と共に、仏陀開演のもので、弟子達に暗誦されたものと伝えられるが、現在は七論の中にふくまれている。カッサバの用いているマータイカーと註釈とはマータイカーのオリジナルなテキストを追及する一つのよすがともなる。註釈は七論のマータイカー全部にわたるが、その内容に於て、他の七論註釈と異った造論者独自の見解をとるだけでなく、仏音のアッタカターとパーリ聖典とが一致しない場合には、アッタカターの伝統を却けている程である。例えば、アッタカターに於て、心の刹那生起を説明する場合の重要な語たる *uppajjitha* を解し、それが、アッタカターの意味する如き、単なる現在の刹那に関するものというのではなく、却って過去の刹那的の心法に關係するものであると述べている如

くである。この所言はペーリーの哲学理解上、重要なことからである。何故なれば、心刹那性の説明として、従来は仏音のアッタカターを主とし、それを現在の刹那と解する仕方が通用せられていたからである。又、アビダツマ研究史上、如何にしてセイロンでなく現在のビルマでアビダツマ研究が持続されているかという現代に至る問題にも指針を与える書である。何故なれば、該書に続いてビルマはその伝統的研究をこれにそそいでいるからである。次に、アビダツマが仏教学研究の基礎であるということは、日本の過去に於て俱舍論が研究されたこと軌を一にする。アビダツマの基礎的研究なければ大乘哲学理解は反復に陥入るおそれがある。新しい問題意識と分析的研究を求め、それに国際的知性のハイライトを与えるためには、アビダツマを中心とし、その前後に歴史的関心を向けてゆくという方法論がとられることが必要であろう。学問的進歩は何んといつても、experimental な記述の反復ではなく、知識の accumulation を第一とするからである。その意味で、該書は古典と同時に新しい研究の基礎となるものとして、同時代の人アムルツダの *Abhidhammathasāṅgaha* と並びアビダツマのみでなく仏教学の根本的指南書として其の価値は高い。特に、それはマナーテイカーの最も完成された註釈を代表するものであるからである。又、アムルツダの前記の書と違っている点は、このテキストは単なるシノピシスでなく、ニカーヤの註釈の形式に従い、概念の分析と同時に、教義全体この関係を考慮して註釈せられているから、哲学的要求にも答えうるものである。なほ、二十三頁にわたるインデックスは他の校訂本以上に、原典読解

に利益するところが多い。

次に紹介する *Jinakalamāli* というのはタイの *Ratanaparāṇā* により、一五一六年に述作せられたものであって、仏教寺院史に相応する。述作者はタイの *Chien Mai* の *Rattavanavithara* に住していた。 *Jinakalamāli* と *the Garland of Epochs of Buddhism* の意味であつて、内容上、三部門に分かれる。第一部門は菩薩が仏陀になるまでのジャータカであるが、現在のジャータカ・ニダーナと相違した点もあり、特に現存ジャータカに含まれていないところの *Vyagghijātaka* が本書に見出される。第二部門はインド並びにセイロンの仏教史である。これについては、既に、マハーバンサ・トウーパバンサ・ダーターバンサ・ラーターダートウバンサ及びボーディバンサがあるが、内容はこれらに準じている。興味あるところは、第三部門のタイ仏教の宗教及び政治史に関する部門である。タイ・カンボシアをタイの *Menam Valley* 地方を中心として、記述している。この地方史については、たとえ、南方諸国に層々ある如き伝説的なものも多けれども、一つの歴史的資料として従来の研究に再考を求めるとも少なくない。第四部門はセイロンとタイとの宗教的交渉についてである。セイロン・タイの宗教的關係については、既に、 *Paranavithana* がロイアル・アジアテイクソクサイエティで論文を発表しており、又、このテキストの或る部分は *Coedes* の手によつて *Bulletin de l'École Française d'Extrême Orient* (Vol. xxv) で発表せられている。これによつて理解出来る如く、本テキストは歴史的研究資料として既に海外学者の注意するところのものとなつていた。

又、仏教僧伽或は教団史研究として、我国での研究は多くなく、海外では、S. Dutt の教団史研究が一つの偉れた業績として知られている以外、殆んど、僧伽史は原始仏教及び律藏内に限られている現状である。これに対して、政治・宗教史という流れの上で、教団史の中世以後の発展を見ることが望まれている。例えば、ビルマ仏教史で重要な出来事は一一八一—一二二二 A・D にセイロンで得度した Capata がセイロン教団を設立した。かくて、セイロンの *Sinhala Sangha* とブルマの *Mran-na Sangha* の対立は三世紀間続き、最後には前者が優勢を占めたという史実からすれば、丁度この対立が終末に来た十五世紀初期、この書がかかれたことになる。述作者はタイの比丘であったが、彼は既述の如くタイ北部出身で、Menam Valley の *Sinhala Satcha* に属していたと云ふ *Ratanapāṇa* であつたということは、興味ある比較研究の材料とビルマに於ける両僧伽の対立に対する傍証を与えることにもなる。而も、タイの

この僧伽の設立は A・D・一四一三年であり、又、創設者はセイロンで入団した長老達であつたから、ビルマでの *Sinhala Sangha* の勢力の優勢化と相まって、タイに於ても、又、セイロンの僧団が優勢を極めてゆつたことが知られる。この例だけからしても、本書がビルマとタイの仏教史研究上に与える価値が伺える。又、曾って、北インドにいた五世紀頃のパーリの大註釈家仏音がセイロンへ下り、アッタカターを述べた後、如何なる経過をたどつたかという問題(佐々木現順著「仏教心理学の研究」九九—一五頁参照)に対しても、本書の仏教外の政治史はいくらかの暗示を与えうるものである。現在、国際的に東南アジアの社会、政治史が研究されはじめたが、それらは多くの点で、古典を中心とした史実或は伝承をもととしなければ、その研究をすすめない実情であるということを考えれば、現代史研究への意味という点でも、本書の古典的意味のみならず現代の意味もまた看過しえないものである (G. H. SASAKI)。